
第 10 章 有効召命

10. 1. 神は命に至るように予定されたすべての人々を、ただ彼らだけを自ら定めて置き、適当な時に、ご自身の御言葉と聖霊によって（Ⅱテサロニケ 2:13, 14、Ⅱコリント 3:3, 6）、有効に召命することを（ロマ 8:30, 11:7、エペソ 1:10, 11）喜ばれました。神は彼らが本性上、罪と死の状態から、イエス・キリストによる恵みと救いへと召します（ロマ 8:2、エペソ 2:1-5、Ⅱテモテ 1:9, 10）。この召しによって神は、彼らの心を霊的に、救済的(savingly)に悟らせて、彼らに神の働きなどを理解させ（使徒 26:18、Ⅰコリント 2:10, 12、エペソ 1:17, 18）、彼らの石のように頑なな心を取り除き、彼らに肉のようなやわらかい心を与え（エゼキエル 36:26）、彼らの意志を新たにし、その全能の力によって彼らが善に向かって立ち帰るようにさせ（エゼキエル 11:19、ピリピ 2:13、申 30:6、エゼキエル 36:27）、また彼らをイエス・キリストへと有効に引き寄せます（エペソ 1:19、ヨハネ 6:44, 45）。しかも、神がこのように行われる方法によって、彼らは最も自由に来ることができ、神の恵みへと自発的に近づきます（雅歌 1:4、詩 110:3、ヨハネ 6:37、ロマ 6:16-18）。

聖霊の有効召命を説明するにあたって、何より先に予定を言及しました。神の選びは、有効召命の効果が現れた時に知ることができることを叙述するためです。そして 1 項は、有効召命の中で起きて来る効果を具体的に説明していま

す。清教徒たちやウェストミンスター総会員たちが有効召命という用語を使用するのは、福音への召命が普遍的なものとして、すべての人に与えられますが、その中で、实际的に救いの恵みが適用される場合を説明するためです。また、福音への召命が外的に与えられますが、それ自体で効力があるのではなく、聖霊の内面的で、効果的な召しがあってこそ新生が起こされ、回心するようになることを語るためです。さらに有効召命は、神が救いへと定められた手段の中で起こることなので、必ず、恵みの手段が使用されるべきであることを強調しています。この説明は、神の選ばれた民は、神が救うだろうから「恵みの手段の使用が不要ない」という言葉が言えなくなります。

有効召命の手段は、御言葉と聖霊です。神が御言葉と聖霊を使用なさり、私たちを神ご自身へと召すのです。神の有効召命は常に効果的で、聖霊によって行われるからです。それゆえ教会は一生懸命に福音を伝えなければならないのです。さらに真理の知識がない所では、聖霊は御業を行われません。聖書が教えられることなく、救いはあり得ないです。聖霊さまは御言葉を用います。神は、聖霊によって神の御言葉を私たちの心に記録させます。清教徒たちの有効召命に対する説明は、神が罪によって死んでいる人を実際に救うことです。これは、ただ救いについての理論ではなく、ただ教理に対する知識だけで留まる状態を意味するものではありません。聖霊の有効な御業は、聖なる召しとも呼ばれますが、罪と死から救い出し、恵みと救いの状態にいるようにさせることです。これは、聖霊さまが実際に救う方式で、救いの恵みが適用される人には、实际的靈的体験なのです。

従って1項において、聖霊の有効な御業とその過程で起きる靈的体験とを関連して叙述しました。つまり、聖霊の有効な御業を、聖霊の働かれる原理に従って順序的に叙述していますが、靈的理解力が起きるようにさせ、救いについて悟るようにさせ、偏見と不信仰を除去させ、意志を更新させ、キリストに行くようにさせるのです。これは聖霊さまが、靈的に聖なる原理と性向を心に植

えることで靈魂は、靈的なものを追求することができ、聖靈の御業によって意志の更新が、キリストに自由に出て行くようにさせます。それで靈魂は、キリストを求め、行けるようになるのです。まして1項において、このような有効召命がある者だけに教会の会員権を付与するという内容はないけれど、清教徒たちは回心を明確に体験した者だけに教会の会員として（洗礼信者）として受け入れ、そのようにして教会の敬虔の力を確保しようとしたのです。

ウェストミンスター信仰告白書では、新生という用語を使用せずに、聖靈の有効召命という用語を使用するのは、聖靈の御業があつてこそ認知できる、靈的現象に対して説明するためです。新生という用語のもとでは、聖靈の神秘的な働きによるすべては知ることはできず、また、説明することもできないからです。また、清教徒たちが最も多く使用する単語は「回心」です。その単語の代わりに、有効召命として説明した理由も、聖靈の主権的働きをさらに強調するためです。

ウェストミンスター総会員たちは、有効召命と救済論とに該当される部分に、より一層多くの注意を払いました。その当時、誤りの中で誤りであるアルミニウス主義のためです。アルミニウス主義者たちは、理性に超自然的な聖靈の悟らせる御業が必要ないと主張し、さらに聖靈の御業がなくても、すべての人は福音の招待に応答できると強調しました。結局、アルミニウス主義の方式で救いを理解しているのなら、本人には救いが無いのに、救われたと錯覚することができます。これを清教徒たちは「自分自らの偽り確信 (self wrong assurance)」と呼びました。従ってアルミニウス主義は、とても危険な神学です。

一方、アルミニウス主義の反対、極端なハイパーカルヴァン主義 (Hyper-calvinism) では、神の予定があるなら有効召命以前に、すでに救われたと主張します。神が予定した民は、神が救うので人々に伝道しなくても良いと

言いますが、これは明白な誤りとして教会を霊的怠慢に陥るようにさせます。ハイパーカルヴァン主義者は恵みの手段の使用を無視しますが、神が選んだ民を救う時、その救いの方式を定めて置いたことを知らないからです。現代長老教会から、珍しくないほど確認することができる教えです。

1 項の有効召命を説明する時、聖霊の御業を中心に、具体的霊的变化に焦点を置いています。清教徒たちのこのような強調は牧会的で、伝道的な目的があります。会衆をお世話し、一人の霊魂がキリストに立ち帰るまで、霊的状态を調べるための目的があります。これは、ウィリアム・パーキンスの「黄金の鎖」以降に、清教徒の神学的特徴です。ところが、改革神学の陣営でも、このような聖霊の御業を反対するグループが歴史の中で続けて起こされました。18 世紀のアメリカ長老教会の旧派 (Old Side、1741-1758) が聖霊の有効召命を反対しました。結局、このような神学によってアメリカ長老教会の旧派は、教会の霊的力動性を失ってしまい、弱体し 1758 年にアメリカ長老教会の新派 (New Side) に吸収統合されてしまいました。20 世紀に至っては、オランダ改革神学の陣営でも、本項において叙述されている具体的言及を放棄し、知的な要素、情緒的な要素、意志的な要素として見て、あいまいにさせてしまいました。⁹⁴

20 世紀から始まった現代福音主義者たちは、始めから改革神学を断っているから、有効召命に対することを受け入れませんでした。人間の自由意志の力を信じているから、人間の自発的意思を持ってキリストを受け入れることを教え、彼らの伝道と宣教に適用させました。現代福音主義の教会内で、真に回心した者たちを、中々探すことのできない理由がここにあります。

94 Louis Berkhof, Systematic Theology 参照。ルイス・ベルコフのこのような説明は、アブラハム・カイパー (Abraham Kuyper) の「Holy Spirit」を従ったように見えますが、ベルコフは聖霊の召命を、命の種が植えられて情緒と感情が柔らかくなり、意志が屈服されたことと話しました。オランダ改革神学のこのような神学的性向は、伝道と宣教において聖霊の力動性を失うようにさせました。

20世紀の改革神学内でも、聖霊の有効召命に対して否定的な立場を取るグループが形成されましたが、アブラハム・カイパー (Abraham Kuyper) の神学を追求する新カルヴァン主義 (Neo Calvinism) です。新カルヴァン主義は、自然 (nature) と恵み (grace) の区分が明確ではありません。従ってカイパーの神学を追求するシルダー (Schilder) と、ホクセマ (Hoeksema) と同様な神学者たちは、回心において、聖霊の罪の叱責 (conviction of sin) の必要性を否定して、キリスト者の生活においても教理的知識 (doctrinal knowledge) だけで十分だと語っています。彼らの神学を、ハイパー契約主義 (Hyper-Covenantism) とも言えますが、聖霊の有効な御業を叙述している霊的体験について嫌悪感を持っています。新カルヴァン主義は改革神学だと標榜しますが、いざ、カルヴァンをはじめとして、清教徒たちが強調した聖霊の救いの御業については反対しています。

10.2. この有効召命は、神の値なしに与える特別な恩恵から出るものであって、決して人間の中に予知される何物からでもありません (Ⅱテモテ 1:9、テトス 3:4, 5、エペソ 2:4, 5, 8, 9、ロマ 9:11)。人間は聖霊によって覚醒され、更新されるまでは、あくまで受動的で、聖霊の御業によって目覚め、更新されてこそ召命に応答することができ (Ⅰコリント 2:14、ロマ 8:7、エペソ 2:5)、召命にあって提供され、伝達される恵みを捕らえることができます (ヨハネ 6:37、エゼキエル 36:27、ヨハネ 5:25)。

2項では、有効召命がある以前の霊的状态と、召命による霊的效果について、対照させながら記述しています。有効召命を、聖霊による霊的覚醒と更新だと説明しました。神は私たちにキリストを頼るようになさいます。これが、私たちに救う神のなさることです。なぜなら、有効召命が、私たちが罪人であることを悟らせ、救いがキリストにあることを知るようになさせ、キリストを探しに行くようになさせるからです。聖霊によって蘇生させるとは、聖霊の力を通して私たちに救いに向かって出て行くようになさせるのです。従って聖霊によって更新

される以前では、無能の状態によって自ら自分を助けることができないのです。このように有効召命にあつての主体は聖霊であつて、聖霊さまが御言葉を道具として用い、神の選ばれた民たちに抵抗できないほど御業を行うのです。このような召命は体験的なものです。

2項において、聖霊の更新以前と、以降を明確に区別することで、新生と回心を区分しました。新生は受動的ですが、回心は能動的です。聖霊によって更新されるまでは、あくまで受動的だと言及したこと、聖霊の御業によって更新された状態では、召命に応答することができる」と叙述したのは、教皇主義者たちとアルミニウス主義者たちを論駁するためです。教皇主義者たちとアルミニウス主義者たちは、新生なしに、自然的力と意志によって善行を行えると主張します。そのような善行は、神の恵みを受けるための準備だと主張します。従つて人間があくまでも受動的でなく、能動的だという主張です。結局、人間と神が互いに協力して救いを成し遂げるとする神人協働説(Synergism)を支持します。しかし2項では、神の恵みのみ成ると叙述することで、神単動説(Monergism)を語っています。最も、アルミニウス主義者たちは、人々が、信仰があることを先に予知しておられ、選ばれたと主張し、聖霊の有効召命がなくても、自然的力と人間の意志の決断によってキリストを信じられると主張しているから、2項での聖霊の更新の御業があつてこそ能動的になり、聖霊の更新の御業がある以前までは、人間の意志を持って恵みを受け入れられないことを明確にしました。

2項は、現代福音主義教会で使用している伝道冊子と伝道集会での、人々の決断を引き出す方法などが誤りだというのを表わします。そのような機械的な方法は、有効召命を否定し、聖霊の更新の御業がなくても人間の意志でキリストを受け入れられるという神学的前提に基づいて、人々の決断を促しているのです。人間の自然的意志の力を持ってキリストを受け入れられ、救われるのなら、聖霊の更新の御業は必要ありません。このような伝道方法の危険性は、聖霊の更新の御業のない人々に、意志と決心と告白を聞いて、救われたと宣言するの

です。

10.3. 幼少のうちに死んだ、選ばれた幼児たちは、いつ、どこでも、ご自身の喜ばれるままに御業を行われ（ヨハネ 3:8）聖霊を通して（ルカ 18:15, 16、使徒 2:38, 39、ヨハネ 3:3, 5、1ヨハネ 5:12、ロマ 8:9）キリストによって新生させられ、救われます。また、御言葉の働きによって外的に召命を受けられる、力のない、他のすべての選ばれた者も同様です（1ヨハネ 5:12、使徒 4:12）。

3項では、一番弱い者の場合を叙述することで、有効召命が神のすべての恵みだと証します。福音の外的手段によって召命できない選ばれた幼児たちや、それ以外、召命を受けられる力のない選ばれた人々には、神が、外的手段を使用せずに、直接、彼らを新生させられ、聖く創造なさいます。ところが3項は、1903年アメリカ長老教会が「選ばれた幼児たち」という文句を「すべての幼児」と改訂させました。1903年のアメリカ長老教会のウェストminster信仰告白書の改訂は、改革神学を放棄し、普遍主義（Universalism）に入っていく公式宣言となります。勿論、清教徒時代にあった再洗礼派は、幼児たちは新生できないと言いながら、幼児洗礼を反対しました。

10.4. 選ばれていない他の人々は、まして、彼らが御言葉の宣教によって召され（マタイ 22:14）、聖霊の一般的な働きを経験したとしても（マタイ 7:22, 13:20, 21、ヘブル 6:4, 5）、彼らは決して、キリストに真実に出たのではない、それゆえ、救われることはありません（ヨハネ 6:64-66, 8:24）、最も、キリスト教信仰を告白しない者は、他のどの方式によっても救われることはできず、彼らが本性の光と、彼らの告白する宗教の法に従って注意深く秩序ある生活をしたとしても救いは得られません（使徒 4:12、ヨハネ 14:6、エペソ 2:12、ヨハネ 4:22, 17:3）。彼らが、他の違う方式によっても救われると主張することは、きわめて有害で憎むべきことです（Ⅱヨハネ 9-11、Ⅰコリント 16:22、ガラテヤ 1:6-8）。

4項は、外的に選ばれた民のように見えても、実際的に有効召命がない場合を説明しました。彼らは、神の恵みの手段の下で御言葉を経験し、聖霊の賜物を経験したとしても、救いの恵みがない場合です。清教徒たちはこのような場合を、類似キリスト者 (almost Christian) と呼び、また偽善者としました。⁹⁵

4項で語っているのと同様に、清教徒たちはこのような霊的状态を明確にするために、聖霊の働きを、特別働きと一般働きとして区分しました。聖霊の特別な働きは、有効召命を意味し、聖霊の一般働きとは、教会に賜物を付与なさることです。従って教会の中で、聖霊の一般的な御業によって聖霊の賜物を経験したとしても、聖霊の特別な働きである有効召命がない場合、救われてはいないのです。実際に、聖霊の有効召命がないまま教会生活をし、奉仕もできます。このような場合、キリストに真に出て来たのではないので、救いはありません。

4項の後半部は、キリスト教以外に、自然宗教によって救われないことを説明しました。勿論、彼らが、道徳的行為を追求すると言っても、腐敗された心の中から行ったことなので、徳になりません。腐敗している所からは腐敗した実だけを結びます。また、宗教的律法主義によっても救いは得られません。それは、自分の罪と無能と腐敗を認めようともせず、キリストの必要性も認識していないからです。清教徒たちが、このような霊的事例を具体的に叙述した理由は、教会の外的な働きによって教会に入ってくるがあっても、有効召命のない者たちには、教会の会員権 (洗礼信者) を与えませんでした。そのような働きを通して教会の敬虔の力を維持させようとした、努力を見せてくれるのです。清教徒たちの教会論の核心は「救いの恵みがはっきり表れる聖徒 (visible Saints) であって、偽り信仰と偽善者たちを区別できないのなら、教会に大きな有害を

95 マシュー・ミッドは、類似キリスト者 (ソウル：地平書院) 参照.

及ぼすと見たからです。それで清教徒たちは、教会に偽り信仰告白者と偽善者たちが多くならないように注意を払い、牧会者は、真の救いの恵みと偽り信仰とに対して明確に区別させ、会衆が自己点検をするように教えました。

4項において、ウェストミンスター総会員たちが警戒していたことが、現代福音主義の傘の下では全然問題になっていません。五旬節神学では、聖霊の一般働きである聖霊の賜物を、一番高い水準に置いて、聖霊の賜物を持っているなら、救いの恵みは当然ある、だけでなく、霊的に高い水準にいると見なします。現代福音主義教会での、最も、普遍的な伝道メッセージと方式は、有効召命を求めるのではなく、キリストを信じるといふ意思の決断を求めています。これは人間の自由意志の決断を、信仰として見るアルミニウス主義に根を置いているからです。いくらキリストを信じると決心したとしても、その内面に聖霊の有効召命がないなら、救いはありません。

21世紀の救済論にあつて、二つの誤りは、アルミニウス主義と道德律廢棄論主義ですが、これは16-17世紀の清教徒時代と18世紀の霊的大覚醒時代（ジョン・エドワーズ時代）にも、2大の誤りでした。19世紀にチャールズ・ピニー以降から大流行して、20世紀からは、福音主義を標榜している教会等の中で簡単に発見できる救済論です。この誤り等々は、有効召命を反対する共通点を持っています。